

CLCからしだね書店便り



9 September
2024
no.45

今月のご案内

- ① 連載第9回
「子どもと大人のためのこころの対話」
— 信仰と哲学 —
- ② 読書感想本『子どもが孤独ひとりでいる時間』
- ③ CLCからしだね書店からおすすめしたい一冊
『苦しむ人・悲しむ人の支えとなるために』
スピリチュアルケアの現場から』



CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店 & カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
日曜日と年末年始（※祝日も営業）
定休日 毎月第3木曜日は書店のみ営業

今回のポイントをまとめましょう。

- ① イエスは天から人と同じ目線にまで降りてきた（キリスト教用語で「受肉」と言う）。
- ② パウロもまた、相手の立場になりきろうとした。相手が生まれ育ってきた人生史の中で、大切にしてきた価値や文化的・宗教的背景を大切にして関わること。これもまた「受肉」的な姿勢だとと言える。
- ③ ただし、イエスもパウロも、自分の大切にしている価値やアイデンティティといった「自分軸」を見失うことはなかった。
- ④ 「自分は自分」「相手は相手」というバウンダリーを見失って、それは「共感的理解」ではなく、「支配」や「依存」に近くなる。相手の領域や独立性に関するわきまえをもつことが大事。



まず相手が大切にしているものや、バックグラウンドを尊重する。そうでなければ、「真理」は相手を黙らせる暴力になってしまいます。一方で、「なんでも相手の言いなりにならない」こと、「自分自身を大切にすること」もまた、同じくらい大切ですよ。

「自分を大切にするように隣人を大切にしよう」というのが、イエスの教えです。しかし、その前提は「自分を大切にすること」なのです。自分自身を尊重する姿勢がなければ、相手を尊重することもできない、と言えるでしょう。

哲学の言葉では、このような態度のことを「人格の相互尊重」（ヘーゲル）と言います。「相互尊重」は近代市民社会の原理になった重要な理念です。このことについては、いずれまた詳しく論じてみたいと思います。



さかおか おおじ
1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。本質学研究会、哲学プラクティス学会、宗教倫理学会、キリスト教教育学会等の学術誌に論文掲載。札幌市若者支援施設 Youth+（ユースプラス）でワカモノ哲学カフェを主宰するなど、オンラインや地域で子ども・若者と共に哲学対話を行う活動に取り組む。

親も子も、それぞれ自分自身を生きよ、いのだと、教えてくれる本

『子どもが孤独でいる時間』

ひとりとき エリーズ・ポールディング 著 松岡享子 訳（ごま社） 1,430円（本体 1,300円）



「学校、行かない」と、ある日、唐突にわが子が言う。親は、慌てふためきます。そして、「あなたのことはいいたいわかってるのよ」みたいな気になっていたり、が大間違いで、「この子の親」としては若葉マークだったんだ……という事実を、思い知らされる日々がやってきました。

そもそも、親と子どもとは全くの別人格。性格も生育環境も取り巻く人間関係も、子どもとして過ごす時代背景も、自分と自分の子とは、全く違うのです。だから、いつたいわが子が今、何を考えているのか、何を悩んでいるのか、どんなことを感じているのか、知ることなどできません。

特に「努力すればなんとかなる」と言われ続けて努力した結果、「なんとかなってしまっただ親」の輝かしい成功体験は、たいへん説得力のある言葉であるかのような錯覚を生み、しみじみそんな「成功談」を語るなら、子どもは逆に固く心を閉ざしていきます。「世界には、学校に行きたくてもいけない子どもがたくさんいる。それに比べれば……」と、今度は子どもの知らない世界で起きていることを持ち出して、子どもの狭い世界を無理やり広げてやるうと試みますが、「誰とも比較なんかできないその子だけの深い世界」を前にして、親のトンチンカンさは際立つばかりです。

このように多くの親は、なんとか子どもを理解したいと思いま

すし、子どもが一刻も早く、明るく元気な「日常」に戻ってくれるようにと願います。その挙句、「今、親ができることは何だろう？」と、子どもそっこのけで自身の深い悩みに突入していくのではないのでしょうか。

自分は親として何をすればよいのか？何をしてはいけないのか？どんな言葉をかければよいのか？どんな言葉をかけてはいけないのか？間違ったことをしてはいけないけれど、今しかできない正しいことをちゃんと今、やらないといけない。そうでないと、子どもの人生がダメになる。そんな思いに囚われて、どんどん深みにはまっています。

朝に夕に困ったときの神頼み的な祈りをしてみます。それで心が休まるかというところとも休まりません。神さまは、たいがいの場合、祈れば即効「こうしたらいいよ」的アドバイスなんかくれるおかたではないので、「神さま、沈黙ですか」という長い時間を探りて過ごすことになりま。でも、神さまへの信頼をぶちっど断ち切れない理由は、「きつと神さまの方が私の手をつなぎ続けておられるからだろうな」という気もして、神さまのお考えがなんだかよくわからないまま、しくしく泣きながらの毎日がしばらく続きます。

さて、そんな大人の皆さまに、ぜひ、読んでいただきたいのが、この本です。

わたしたちは、ふつづ子どもと孤独を結びつけて考えようとはしません。孤独と聞いてまず感じるのが淋しさであり、孤独の意味するものが、身寄りのないこと、仲間がいないこと、人から離れて孤立していることであってみれば、わたしたちは、できることなら、子どもをそのような状態におきたくない、と願います。

ところが、この小さな書物では、著書は、孤独(ひとりであること)に別の角度から光をあて、その積極的な意味をさぐります。そしておとな同様、子どもにとっても、生活のどこかに「孤独(ひとり)でいる時間(とき)」をもつことが必要だ、と説くのです。それは、自由であること、内へ向かうこと、自分自身を発見することのために欠かせない条件であり、人間にはひとりであるときにしか起こらないある種の成長があるのだ、と。(はじめに「3~4ページ」)

このように冒頭から、「孤独」というマイナスイメージの言葉を、むしろ、子どもに必要な空間と時間として捉えなおすよう勧められています。

そう言えば、オンラインでいろいろなことができるようになった昨今、「タイムパフォーマンス(タイパ)」という言葉が流行っており、これは「短い時間でより効率的に物事を成し遂げたという満足感こそが大事で、一日をどれだけたくさんの仕事や趣味で埋められるかが自分の暮らしの充実度を表す」という考え方です。まるでコレクションのように増えていくネットつながりの「友達」の数は、自分の交友関係の広さとともに、タイパを測る物差しにもなります。

この本は、タイパや「友達」を否定するものではありません。しかし、この本からは「なんのためのタイパなのか?」「どういう人達とつながりたいのか?」「それによって、自分は心から満

にそのような孤独でいる時間を十分に味わったといういくつかの例をあげています。

アインシュタインは、十五歳のとき、学校がいやでいやでたまらなくなりました。そのため、校医は、とうとうかれに「神経衰弱につき、最低六か月間、両親と共にイタリヤにおいて静養を要する」旨の診断書を書き与えました。こうしてアインシュタインは、あちこちの教会を訪れ、アペニン山脈の山々を歩きまわりました。もし光線を封じ込められたらどうなるだろうと考え始めたのは、まさにこの時期だったのです。(34ページ)

一方で筆者は、「孤独」と「孤立」は全く別のものだとも言います。いじめられたり、捨てられたりすることが、子どもの心に良い影響を与えないのは、当然のことです。私は、何年前かに、「便所飯(孤立している自分を周囲から隠すために、昼休みのお弁当をトイレで食べる)」なんていう、悲しい言葉を知ったのですが、そこに追い込まれる人の気持ちを想像して、胸がひどく痛みました。

もしそんな状況に子どもが置かれているとしたら、「孤立」から「孤独」へと場所を移動させてあげるのが大人の役割ではないでしょうか。それは、ある子にとっては「学校へ行かない」という選択になるかもしれないし、ある子にとっては、つまらない「友達作り」なんてものはさっさと見限って、ひたすら図書館で本を読む時間に充てる、ということかもしれません。(本は決して裏切らない友達であり、人生の道案内です。)

私は、この本を読んで、学校に「一人でいられるスペース」があつたらいいな、と思いました。保健室がそういう役割を消極的

足しているのか?」という問いが迫ってきます。そして、そのような問いに応答する「私」というアイデンティティは、ちゃんと育っているのか?と、鋭く突っ込まれます。

社会化や、社会への適応の過程にのみとらわれていたのでは、人間の中にある「神聖なるプラスアルファ」ともいえるべきものを説明することはできません。このプラスアルファこそが、究極的には、人間を単に自分が置かれた環境に順応するだけの存在に終わらせない何かなのです。(中略)もし人間が、そのための時間をとり、孤独の中に身を置いて、自分の内側で何かが起こることをゆるさなければ、人間は、必ずや精神的に行き詰まってしまっただろう、と。子どもでも、おとなでも、たえまなく刺激に身をさらし、外側の世界に反応することに多大のエネルギーを費やしていると、人間は刺激に溺れ、内面生活や、そこから生じる想像力、あるいは創造性の成長を阻止し、萎縮させることになるだろう、と。(14~15ページ)

筆者は、ひとりであることが利己的であるかのように思い込み、集団に自らを埋没させてしまう風潮を嘆き、それがセンチメンタルな言い草だと思わないために、神経系統の機能と創造力が発動するための条件に関しての研究についても述べています。そして、子どもが集団から外れたすみっこで一人黙々と何かを始めると、大慌てで引つ張り出そうとする大人に対して警鐘を鳴らします。創造性の成長のためには、ひとかたまりの、誰にも妨げられないことのない大きな時間が必要で、その時間を用いて、脳は意識と無意識の両層で、印象を選び分け、並べかえ、新しいパターンを創る——創造するのだと言います。そのうえで、アインシュタインをはじめ、多くの創造的な仕事をした人達が、子ども時代にはたしてきたとも言えますが、私はそのような場所に、もっと積極的な意味づけがほしいのです。学校の中でいちばん陽当たりがよくて、開放感のある贅沢な場所。誰かの目を気にするのではなく、「孤独でいたい」と願う人が、思い思いに過ごせる広いスペースと、ちよつと奥まった隠れ家のようなスペース。そこでは、人の「孤独」をじゃましない、というのがルールです。生徒だけでなく、先生にも、地域の人たちにも開放されていて、なおかつ犬猫と触れ合える一画があったら最高。なによりそこでは、誰もがお互いの「孤独」を尊重し合うことを、知らず知らずのうちに学ぶことができます。孤独の喜び、哀しみ、さびしさ、心地良さを十分に味わい、それらの上に自分自身を築いていくことができる「人としての誇り」。お互いの、孤独を尊重し、孤独な者どうしが、自然につながり合っている、そんな美しい場所、もしかすると私たちは、本当の意味で「神」と出合うことができるのかもかもしれません。

この本の作者は、社会学を通して大学時代にクエーカー教徒になった女性なのですが、この本がアメリカで出版されたのが1962年、日本語に訳して出版されたのがその四半世紀後の1988年です。初版から約60年の時を経た現代、そこに書かれていることは、ますます今日的なものとなっています。原語はかなり難解なものようですが、表現力豊かな翻訳者によって平易で味のある日本語に訳されています。

この本の日本語版の最後に、「親たちのための祈り」というのがあります。これは本当に素晴らしい祈りです。私は、コピーして手帳にはさんでいます。折りながら、親もまた、勇気と励ましをいただくことができます。

書店員 M・M

森住ゆき 和紙ちぎり絵カレンダー 2025

毎月めくるのが待ち遠しい...
文字は見やすく、和紙の質感が美しい、
書店員おススメのカレンダーです。
日本語と英語の聖句が入っています。

11月21日(木)15:00~
オンライントークライブやります!

森住ゆきさん(ちぎり絵作家)
大頭真一さん(京都信愛教会・明野村教会牧師)
安田正人さん(株式会社ヨベル社長)
場所:CLCからしだね書店&カフェ・トライアングル

森住ゆき
こどものための
神のものかたまり
原画展

開催 11月18日(月)~23日(土祝)

それぞれの作品が
楽しいきれいなイラスト!!

みことばは英語も

読みやすい!
使いやすい!



CLCからしだね書店 TEL 075-574-1001 FAX 075-574-0025 問い合わせ clc@karashidane.or.jp

書店からのおすすめ本

『苦しむ人・悲しむ人の支えとなるために』スピリチュアルケアの現場から

窪寺俊之・島田裕子・赤羽正清・岸本光子・清田直人・上田直宏・著
(いのちのことば社) 1,500円(税)

この本は、スピリチュアルケアとは何か?という問いを、若者支援、病院のチャプレン、カウンセラー、教師など、分野の違う現場の支援者たちの生の声を通して探っていくという試みです。それぞれの現場からの報告は、皆、一筋縄ではいかない、何をもちて「解決した」とあるいは「支援終了」と言い切ることができるのか、という悩みで満ちています。けれども、その悩みと付き合っていくこうとするお一人一人の姿勢と言葉には、誠実なあなたが感じられます。

クリスマスチャンは、神による「解決」を急ぎ、ハッピーエンドや「証し映え」する派手な体験談を期待しがちです。それはパターン化された、誰がきいてもわかりやすい「解決」の場合が多く、他人から「神様の恵みですね」とか「感謝ですね」とか「素晴らしいですね」とか言われれば言われるほど、なんだかどんどん自分の体験からは遠ざかっていくような気がするものです。

ある方が教会で、ケンカ別れした親友に和解を求めて手紙を書いたという「証し」をしてくださったことがありました。その結果、その親友と再会して涙の和解ができました。...というわけではなく、「なんの連絡もありません」

というそつけない「証し」でした。支援の現場も、そんな報われないうっかりすることだらけです。けれども「スピリチュアルケア」という視点を持てば、その報われなさの中でこそ、生きる意味や人の存在価値を問いつけることが可能になるのだと思えました。また、失敗に終わったように見えたとしても、むしろそこに至るプロセスの中にいらっしやる神の存在に気づくことは、その人の人生に大きな意味をもたらすのだとも思いました。ちなみに「なんの連絡もありません」と「証し」したその方は、穏やかなほつとした顔をしておられました。

執筆者の皆さんの報告に出てくるひとつひとつのエピソードはすべて、たいへん優しい、あたたかな視点で描かれています。その姿勢と態度は、専門的に支援をしている人だけでなく、普通に暮らしている私たち一人一人が、家族や隣人の苦しみや悲しみにどうやって寄り添ったらよいか悩むときにも、たいへん参考になると思います。

キリスト教書店大賞2024にはノミネートされませんでした。CLCからしだね書店から、おすすめしたい一冊です。



この夏、書店の看板犬「デブ」が天に旅立ちました。16才でした。我が家の犬ですが、福祉施設からしだね館の犬でもあったので、からしだね館でも、書店でも、本の配達に連れて行った際には教会や幼稚園でも、とても可愛がっていただきました。でも一番の仲良しは私の夫で、夫以外の誰か呼びかけてもすべて無視する愛想のなさ、私は大好きでした。

デブの訃報は瞬間に広がり、犬仲間が入れ代わり立ち代わりやって来ては一緒に泣いてくださいました。散歩途中に会う釣り人の女性は、「仲の良いお二人に癒されていました」と、湖畔に行むデブと夫の写真パネルを贈ってくださいました。今はからしだね館の皆さんや家族と思い出を語り合い、泣いたり笑ったりしながら時を過ごしています。犬はそうやって、人と人とを温かく繋ぎ合わせながら、いなくなった後の暮らしを支えてくれるんだなあと思います。



▲「書店のあるからしだね館の屋上にて」

折しも『信徒の友』9月号で、「犬は笑うか 動物と生きる」という特集が組まれていて、とても慰められたのですが、同時に私の妹が「犬はアーメンと言った」という体験談をきかせてくれました。牧師をしている妹は、ある日、信徒さんから「愛犬ミルが死にそうです」という電話を受けました。息も絶え絶えのミルと飼い主ご夫妻(妻がクリスチャン)のそばで、妹はただ祈ることしかできなかつたと言います。「神様、ご夫妻にミルを送ってくださいありがとうございます。大切なミルをあなたの元にお返しします。どうか、あなたの優しい御腕で抱きとめてください」とすると、弱って声も出せなかつたミルが、祈りに呼応するかのよう、一回だけ吠えたというのです。

さて、ミルが逝って数年後のこと、ご主人に末期の癌が見つかりました。「あの日お祈りの後に、ミルは『アーメン』と言いました。私もミルのように、まっすぐ神を信じたい」

ご主人は病床洗礼を受け、おだやかにミルの待つ所へ帰っていかれたとのことでした。

(2024年9月1日発行キリスト新聞「縦断列島書店員日記」に掲載されたものの転記です)

「犬はアーメンと言った」

C/LCからしだね書店店長
坂岡 恵

2024版 本革聖書カバー からしだねオリジナル

共同訳・新改訳聖書の
旧約・新約聖書の
B6版が入るサイズです

ローズピンク
2個

ミントブルー
2個

裁断からステッチまですべて
手作業で仕上げた
こだわりのカバーです

植物タンニンなめしのヌメ革を染料で染めた後、ワックスで仕上げたレザーを使用しています。

ムラ染めのような美しい発色の
ピンクとブルーの2色を、
あえてシンプルなデザインで作成しました。
使い込むごとに艶が出て、
手触りもなめらかになっていきます。

8,000円(税込)

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。
(受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により
当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください)

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本 (多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし (料理、健康、経済等) にかかわる本
- 5 小説 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みの
CD・DVD・月刊誌・週刊誌等は
受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX：075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

浜口雄二様、奥野信二様、林雅美様、水口徹様、水口美智子様、匿名様 (順不同)

7月の古書の収益は17,098円でした。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】

献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきたいと思っております。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆台風10号は、ほぼ10日間にわたって、スピード、進路ともにやきもきさせられましたが、結果、からしだね館の営業には、影響はありませんでした。大事をとって、8月31日(土)を全館休業にさせていただきましたのですが…。とは言え、各地で被害が出ています。被災された皆様にはお見舞いを申し上げます。◆猛暑が続く中、カレンダーや手帳の予約、販売が始まりました。早めのご予約をいただくと、大変ありがたいです。◆からしだね館の看板犬「デブ」が、16才2カ月の地上での営みを終えて、7月24日早朝、天に帰って行きました。怖がりで見知らぬ犬でしたが、可愛がってくださった皆様、本当にありがとうございました。【店長】

スタッフが強いたデブ。キーホルダーにもなりました



お知らせ

以前からお知らせしている「こどものための神のものがたり」の絵本が現在制作進行中、もうすぐ絵本が仕上がります！そして、その制作者である、大頭牧師・森住ゆきさん・発売元のヨベル社社長の安田さんをお招きし、トークライブを行います。詳細・予約は店頭とホームページから。是非ご参加ください。絵本はもちろん、森住ゆきさんのカレンダー・絵はがきも販売します。

11月21日(木)15:00~

オンライントークライブ やります!

森住ゆきさん(ちぎり絵作家)

大頭真一さん(京都信愛教会・明野キリスト教会牧師)

安田正人さん(株式会社ヨベル社長)

場所:CLCからしだね書店&カフェ・トライアングル

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから